

事務局 〒028-3309紫波町日詰駅前1-10-2赤石公民館内 tel 019-676-3999 会長 高橋敬明 tel 090-3125-3776

— 岩手県立博物館テーマ展『比爪-もう一つの平泉-』パンフレット12頁 —

3 比爪-奥州藤原氏第二の拠点- ② 周縁遺跡

《下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡（紫波町南日詰下川原）(2)》

下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡は、北上川と平沢川との合流部に位置します。このような大河川に小河川が注ぐ立地は、川湊に適した地形です。さらにこの地点で北上川は流路が南から東に屈曲し、流れが穏やかになっており、さらに川湊に適した条件を満たしています。

平沢川は、比爪中核部の小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡の東辺を北上川と平行して流れ、さらに比爪館の南の五郎沼から流れ出る山吹川と合流し、下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡付近で北上川に注いでおり、比爪中核部と下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡は水路で連結している様な状況です。このような状況から下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡は、比爪中核部の川湊として機能が想定されます。平沢川は川幅も狭い小河川ですが、引き船による物資の運搬は可能であったと思われる。

《《《 11～12月行事予定のお知らせ 》》》

11月16日 (水曜日)	第77回月例発表会	午後7時から午後9時まで 赤石公民館 発表者：石幡 信 テーマ：気仙沼市本吉と平泉 発表者：高橋 敬明 テーマ：比爪館と関連遺跡の発掘調査4
12月 4日 (日曜日)	第17回定期講演会	時刻/午後1時30分から午後3時30分まで (受付開始時刻：午後1時) 会場/日詰駅前 紫波町赤石公民館 講師/鈴木賢治氏 (紫波町教育委員会専門調査員) 演題/発掘調査に見る比爪館(仮題) 参加料/一人 500円(会員200円)当日、受付へ 参加申込/11月28日までにFAXで赤石公民館 019-676-3999へ送信。 お問合せ/090-3125-3776(高橋)

※ 講演会終了後、参加者の皆さんで「鈴木賢治さんを囲む懇談会〔会費1,000円〕」を開催します。参加を希望する方は、当日受付へ申し込みください。

特別会員の 樋爪 健志 さん(京都府城陽市在住)から おたよりをいただきました。

拝啓 日頃は何かご厚誼を賜り御礼申し上げます。
平素は、ひとかたならぬご高配をいただき深く感謝しております。
以前より私の兄と紫波町に再訪させて頂く予定をしておりましたが、今年の三月に脳梗塞で緊急入院し、一時はどうなるかと心配しましたが、現在は順調に回復してまいりました。また折を見てご訪問させて頂きます。よろしくお願い致します。
毎月の、ひづめ館懇話会の会報ありがとうございます。楽しみに拝見させて頂いております。 敬具
これからの季節、冷え込みが厳しくなりますので、お体にお気をつけくださいませ。
平成二十八年十月七日

樋爪 健志

特別寄稿

「蓮華寺の月」「樋爪館炎上」「秋風 陣ヶ岡」の著者、三島黎子さん(本会会員/本名:宇部真澄さん)に、お願いして会員研修旅行の紀行文を書いていただきました。

復興支援／沿岸の比爪館関連遺跡現地研修
羽柴直人さんと巡るツアー に参加して

宇部真澄

去る9月18日、19日、一泊2日の日程で行われた、ひづめ館懇話会主催の表記のツアーに参加させて頂いた、そのあらましを日程に従ってご報告します。

18日8時半、あいにくの小雨の中、赤石公民館からバスは出発、一路釜石を目指し、予定通り10時過ぎに釜石市郷土資料館に到着。

学芸員の高橋さんが待っていて下さり、釜石川原遺跡(市道鶴住居64号線建設に伴う発掘調査)について説明、発掘品の数々も特別に開示して下さい、手に取って見ることも出来ました。発掘品の鉄製品の多さ。釜石製鉄で有名だったこの地が古くから鉄を産し、様々な生活用品を作っていたのを目の当たりにしました。釣り針様の漁労具がことにも多く、なかには現代の糸切り鋏と全く同じ形の鋏もあり、驚きでした。

そこから大槌町の福幸きらり商店街に向かい、全員が一所に入るよりも、各自好きな店に入って昼食。

午後はまず、羽柴さん担当で発掘調査中の迫田Ⅰ遺跡を、全員長靴に履き替えて羽柴さんの説明を受けて見学、三陸復興道路にかかる土地の発掘で、松の大木が何十本も切られたあとの根元が台風に洗われて、痛々しい姿を曝していました。続いてほど近くの大槌城跡(県指定文化財)に案内して頂き、山城のてっぺんまで見学することが出来ました。こんな急峻な細い道を登った果てにある城、当時は馬で? 今は運転手さんの腕が確かでこそ、と思いましたが、かつては、大槌という地がいかに重要な地であったかを再認識しました。

この日の日程はこれで終了。予定より早く、宿に入るには時間がある、この際どこか希望があれば……、との会長の言葉に、「風の電話に行って見たい」との声が。ですが運転手さんも誰も場所を知らず、通りがかりの男性に尋ねたら、案内してやるから俺の車について来い、と。地元の人親切に大感激。

そのお宅に伺ったら、素敵なお宅が「電話をかける人以外にご遠慮を……」と。ところがなんと、参加者の工藤陸夫氏のお知り合いのお宅で、「工藤さんとご一緒の方々なら」と快く見学を了承して頂きました。広い広い敷地のイングリッシュガーデン風な素敵なお庭に佇む白い電話ボックス。新聞やテレビで話題になった「風の電話」思いがけず訪れることが出来ました。

そうして波板海岸、威勢の良い女将の民宿「さんずろ家」に到着。どの部屋も目の前に海が広がる絶好のロケーション。夜は岡村、大沢両しゃ・ベーる会員の講談も披露され、和気あいの懇親夕食会。

第2日目は、朝食後今回の主要目的地、宮古市の田鎖車堂前遺跡発掘調査地に向かい、担当の県埋蔵文化財センター調査員の福島氏のもと、三十人余りの発掘作業員と共にラジオ体操、その後説明を受けて長靴姿で発掘現場へ。

現場は縄文時代、平安前期、また平泉時代と思われる遺跡が複層的に出てくる非常に難しい現場、と福島さんも羽柴さんも口を揃えました。昨年まで発掘した場所はもう盛り土されて道路建設が進んでおり、現在の場所は過日の台風で水が引かぬ中、年末までの調査期限も迫り、焦燥感いっぱい、と



というお話しに、発掘調査のご苦勞を肌身で感じました。現場事務所に戻ってから発掘物の青磁や白磁、カワラケの破片などを前に、またひとしきり説明を頂きました。

そこから浄土ヶ浜レストハウスに行き、昼食とおみやげ調達。

午後は宮古の国指定史跡、崎山貝塚に向かいました。開館したばかりの真新しい「崎山貝塚縄文の森公園複合施設」では館長さんが待っていて下さって施設の説明、その後職員の方が全部の部屋を案内しながら懇切丁寧に説明して下さいました。出土品の多さには目を瞠るものがあり、巻貝をかたどった器、土器や埴輪など、縄文人のデザインセンスの素晴らしさに感嘆、またこの時代に食していた魚やウニや海草、森の獣や木の実など現代となんら変わらぬ食生活、日々の暮らしは、今日に至るまでおんなじ、と改めて感じさせられました。

その後は宮古駅近くの魚菜市場に立ち寄り、それぞれ魚などの買い物、宮古を3時に出発して帰路につき、5時半、全員無事で赤石公民館に帰りました。

羽柴さん、そして運転手の熊谷さん、ありがとうございました。

☆ 釜石市郷土資料館の高橋さんは埼玉、田鎖車堂前遺跡発掘の福島さんは岡山の出身。紫波にもこんな情熱人間が、施設が……、と参加者皆交々に。

☆ 帰ってから報告を申し付かり、ろくなメモもなく、聞き違い、覚え違いもあるかもしれません。参加者の皆様、訂正事項ありましたらよろしく。



熱心に説明してくださった福島正和さん

☆ 今回の旅程では、震災の被災状況を、その上に沿岸地方を総なめにした台風10号の被害を目の当たりにしました。いまだ不通の道路鉄路があり、宮古から盛岡への閉伊川沿いの道から見下ろす川筋には、流木や折れた枝などがどこまでも堆積して無惨な姿を曝しており、台風の猛威を思い知らされました。沿岸の方々の生活再建の厳しさを思うと、無事で過ごせている紫波の私たちは、平穏な日々には有難さでいっぱいです。

町内遺跡発掘調査等事業報告書[比爪館遺跡第27次] <紫波町教育委員会(平成22年3月30日発行)>

I 比爪館遺跡第27次発掘調査

1 調査に至る経過 (1頁)

平成21年4月14日、箱崎武氏物置建設工事に伴う試掘調査を実施した。180cmほどの現表土を除去したところ、地山土上の層にて遺構・遺物が検出されたため、原因者と協議し記録保存を行った後に工事を行うこととし、引き続き発掘調査を行った。

2 遺跡の立地と環境 =省略=

3 検出遺構と出土遺物 =省略=

4 まとめ (12頁)

今回の調査では、竪穴住居跡1棟、土坑跡1基、井戸跡1基を確認し、土師器を中心に須恵器・かわらけなどの遺物が出土した。

これら主要な遺構・遺物について、過去の調査結果を踏まえながら若干の検討をしたい。

(1) 竪穴住居跡

SI-01 竪穴住居跡は、SE-01 井戸跡に切られる形で検出され、住居跡南側と西側の一部は調査区外であり、北側は倒木痕による影響を受けていた。住居跡全体の埋土より焼土粒、炭化材の散布が確認されたため焼失家屋と思われるが、炭化材の残存状態は非常に悪く、すべて5mm程度の粒状であり、個別の幅や向きなど確認することは出来なかった。

過去の比爪館遺跡発掘調査において、焼失家屋と思われる竪穴住居跡が8棟検出されている。これら住居跡の平面形は多少ばらつきはあるが、1辺が3.0m~6.0mほどの隅丸方形を呈し、カマドは東壁か南壁に設置されている。出土遺物は、土師器坏・甕(坏はロクロ使用、甕はロクロ使用・不使用が混在)、須恵器坏・瓶などであり、今回の出土遺物とほぼ一致している。したがって、平面形やカマドの設置位置、出土遺物などから今回検出された竪穴住居跡は、過去の調査において検出された焼失家屋と同時期の竪穴住居跡である可能性が高いと思われる。

(2) 井戸跡

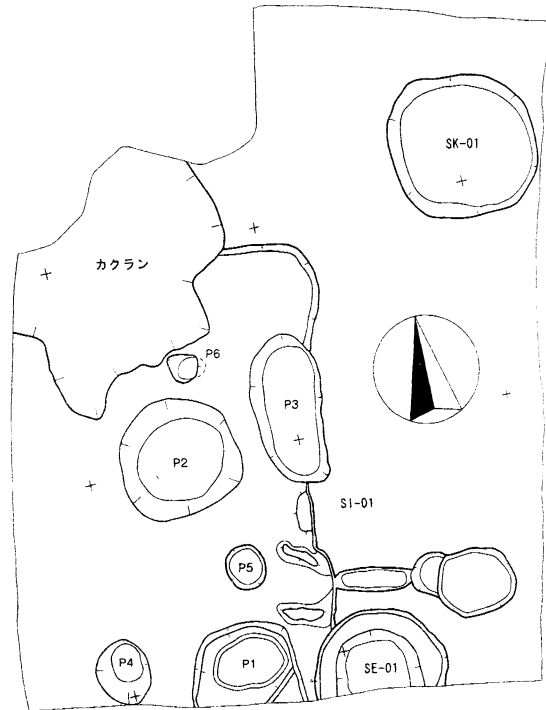
SE-01 井戸跡は、上層の埋土より土師器細片、かわらけ片が2:8の割合でポリ袋(340mm×240mm)1袋分出土したため、精査当初は平安時代末期の可能性が高い井戸跡と思われたが、中層から下層にかけての出土遺物は無く、時代を特定することは出来なかった。また、土師器細片はSI-01 竪穴住居跡からの流れ込み、かわらけ片は旧表土上の包含層からの流れ込みと思われる。

(3) 総括

比爪館遺跡は、過去の調査結果から9世紀後半~10世紀初頭頃の集落跡・平安時代末期奥州藤原氏一族比爪氏の居館跡として周知の遺跡である。また、遺跡内の広範囲で、旧表土上に数十cmほどのかわらけを含む包含層が堆積していることが確認されている。

今回の調査においても過去の調査結果と同様に、旧表土上に30cmほどの包含層が確認されており、今回出土したかわらけ片もこの層から採集したものであり、遺構に伴って出土したものではない。

したがって、今回の調査では平安時代末期の遺構は検出されなかったが、比爪館遺跡内における未調査区域であった南西区域より竪穴住居跡が検出されたことにより、9世紀後半頃の集落跡の面的な広がりを確認することが出来た。



遺構配置図 (4頁)